

資料編



資料編

資料編目次

1. 建造物調査関係資料
 - 1-1. 歴史的建造物調査成果
 - (1) 板橋区内旧野口研究所建造物平面実測図作成委託業務報告書
 - (2) 旧理化学研究所板橋分所建造物実測図作成委託業務報告書
 - 1-2. 史跡陸軍板橋火薬製造所跡建造物調査報告書
2. 史跡陸軍板橋火薬製造所跡保存活用計画・整備基本計画に対するパブリックコメントと区の考え方
3. 用語集
4. 史跡公園イメージパース

1. 建造物調査関係資料

1-1. 歴史的建造物調査成果

(1) 板橋区内旧野口研究所建造物平面実測図作成委託業務報告書

(平成 29 年 2 月 20 日作成)

凡例

1. 本書は、板橋区内旧野口研究所建造物平面実測図作成委託仕様書に基づく業務報告書である。

2. 執筆者

編集・執筆 二村 悟 有限会社花野果代表取締役 博士（工学）

実測・図面作成 防越麻美 フリー 修士（工学）

斎藤史弥 工学院大学大学院修士課程 1 年

渡辺俊裕 工学院大学 3 年 後藤研究室

加藤勇作 工学院大学 3 年 後藤研究室

板橋区担当者 小西雅徳 板橋区教育委員会文化財係長

吉田政博 板橋区教育委員会文化財副係長

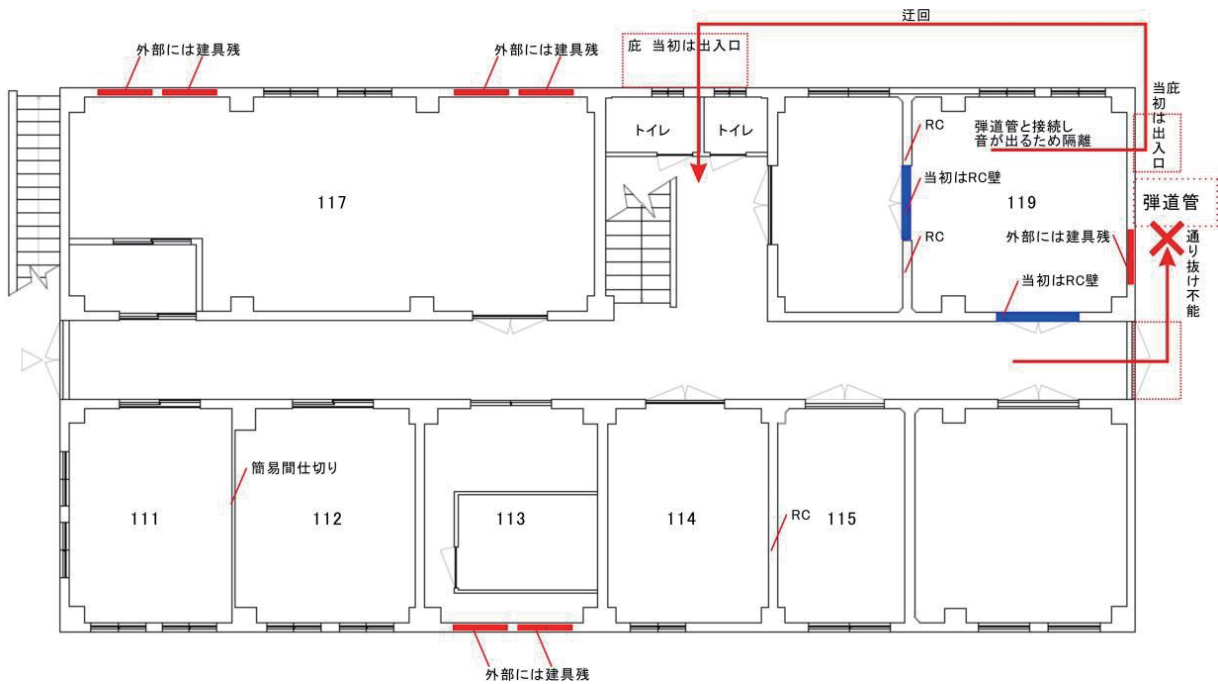
千葉佳夜 板橋区教育委員会文化財係員

3. 実測調査日 2017 年 1 月 15 日

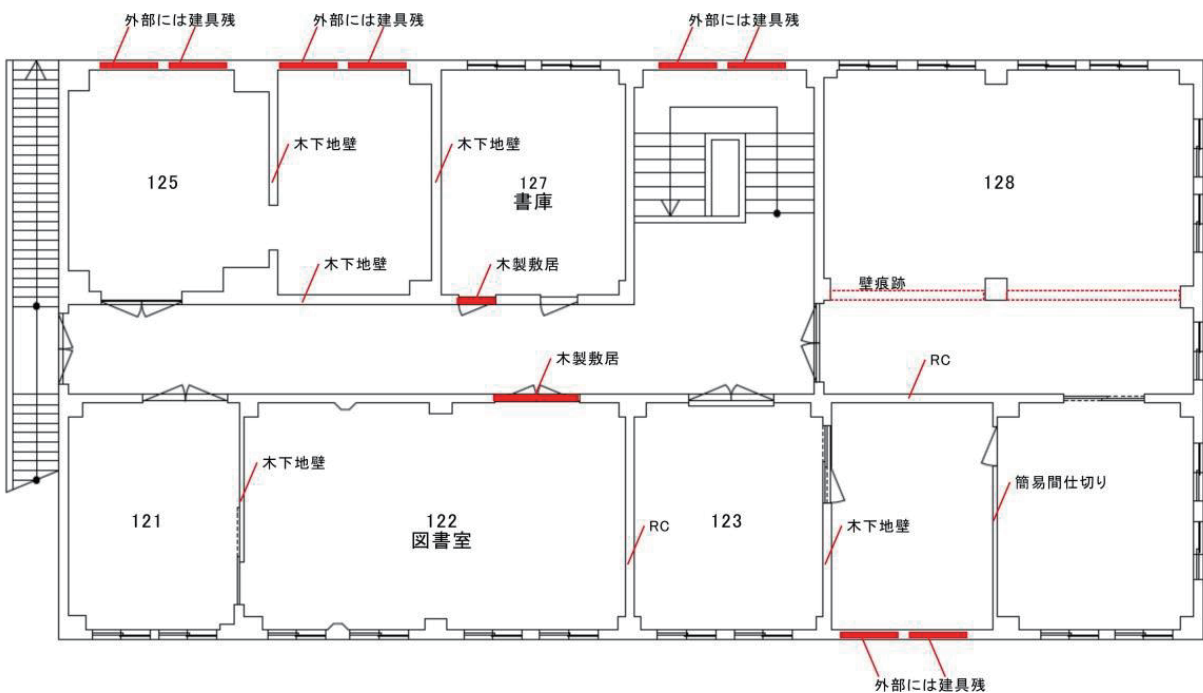
注：本報告書の記述は調査当時の状況を表しており、現存しない 2 号館の記述も含まれている。また、明らかな誤記・誤植等は修正した。

1号館

旧野口研究所1号館は、鉄筋コンクリート造2階建てで、1階廊下に残る当時の分電盤（株式会社杉生電機製作所製）の昭和17年8月製造の銘板や昭和18年発行の地図に確認でき、それ以前の地図では小規模な建物絵が描かれているため、戦争も押し迫った頃に建てられたと推定される。



[図1] 1階平面図



[図2] 2階平面図

外部に面した開口は、全体として更新されているが、1階の窓は南側面を中心にスチールサッシ、その他はアルミサッシである。スチールサッシは当初のものである可能性もある。廊下の東西の出入口には、花崗岩の沓摺石 [図3] が残る。

天井は、廊下は仕上げがないが、各室は後の更新でジプトーンなどが貼られている。



[図3] 1階西側出口の沓摺



[図4] 上・廊下と下・書庫内の床取り合い

床は、1、2階共に廊下はモルタル塗で、2階127書庫内もモルタル塗の床 [図4] が残る。この他は、後の更新でジュータンやリノリウムなどの床材が敷かれている。

巾木は、劣化して赤茶けた様子が見られる部分は当初部分と推定されるが、基本的にモルタル巾木は塗り直されたものと考えられる。

階段は、手摺壁や笠木、巾木に人造石研ぎ出し仕上 [図5] が用いられている。

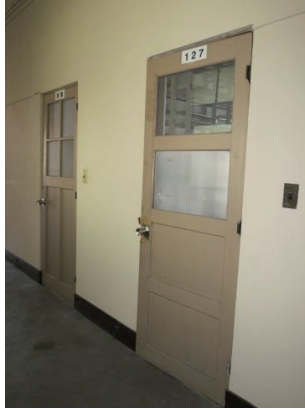


[図5] 階段踊り場の手摺壁



[図6] 121号室欄間

室内の建具は、1階はアルミ建具に更新されており、2階には木製建具も見られるが当初のもので推定されるのは127書庫の出入口2ヶ所、121号室 [図6]、122図書室、123号室の横軸回転窓の欄間と建具枠である。127号室書庫の2ヶ所の木製扉 [図7] は、当初のもので推定され、丁番 [図8] も当時のままであると推定される。



〔図 7〕 127 号室書庫の木製扉



〔図 8〕 丁番

各室を見ると、128 号室は、独立柱等に壁が取付いていた痕跡があるため、元々は部屋が仕切られ、廊下があったものと推定される。



〔図 9〕 左側 P 2 実験室 欄間は埋められている。右の 119 号室は欄間がない。



〔図 10〕 119 号室から隣室を望む

119 号室は、一室だけ廊下側の出入口が欄間のないアルミ建具が納まっており、当初は壁であったと考えられる。123 号室など他も現在は欄間がないが、これらは埋められた痕跡がある。また、119 号室と隣室との境の壁は鉄筋コンクリート造であり、一部を抜いて開口としているが、当初は壁であったと考えられる。隣室の階段側の開口には、現在はアルミサッシが納まっているが、ここには室内側に木製の建具枠〔図 11〕が残っており、当初から開口があったことがわかる。

一方、P 2 実験室と 115 号室の間の壁は鉄筋コンクリート造であるが、中央部には開口部の痕跡がある。当初から開口部だったのか、後に開けた開口を再度埋めたのか、この点は不明である。

年代が想定できるものとして、分電盤がある。株式会社杉生電機製作所製のもので、昭和 17 年 8 月製造の刻印があるものが 2 ヶ所〔図 12〕ある。2015 年 7 月 27 日の調

査時には分電盤内には「発射室」[図 13] のラベルがあったが、現在はなくなっている [図 14]。この他は、室内は設備改修も多く、古い時代の設備等はほとんど見ることができなかった。



[図 11] 木製の建具枠跡



[図 12] 分電盤



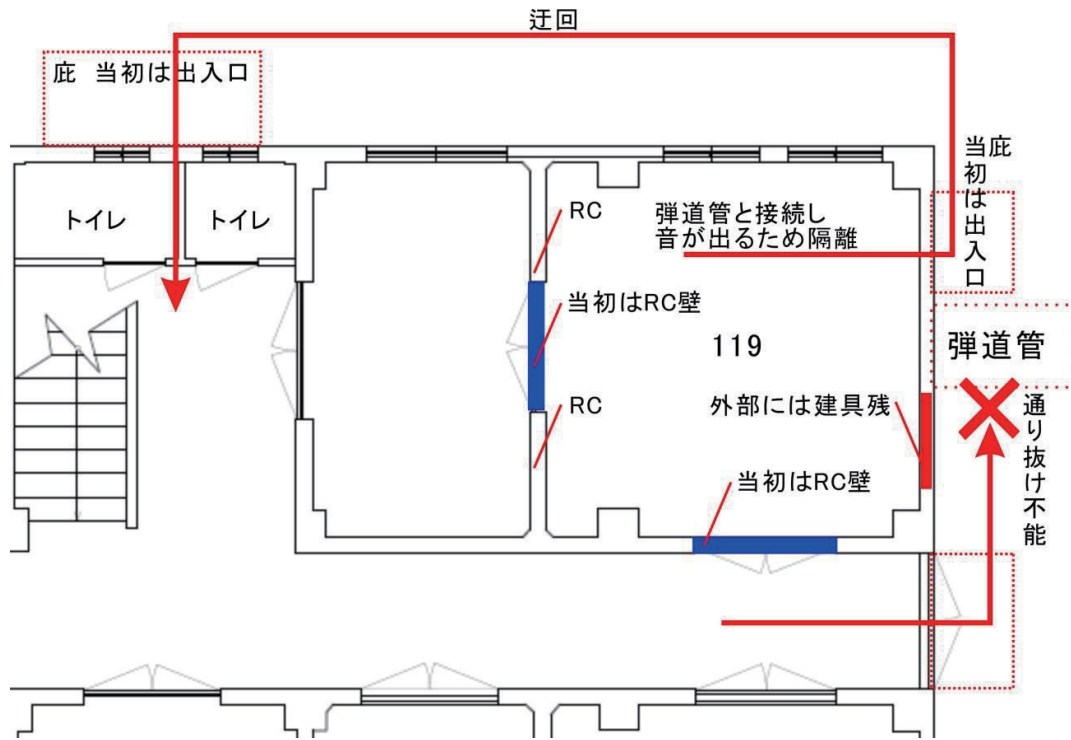
[図 13] 2015年7月27日「発射室」ラベル



[図 14] 今回調査時 ラベルがない

考察的な話題となるが、この「発射室」は現在の 119 号室 [図 15] のことを指すと見られる。ここには外壁面に弾道管が接続し、室内から発射試験を行っていたことが明らかになっている。つまり、かなり大きな音が出るはずなので、室内側とは縁を切る必要があったはずである。その点から見ても、中廊下側や隣室側の壁は鉄筋コンクリート造で埋められていたものと考えられる。また、現在トイレになっている階段下 [図 16] と 119 号室の東側 [図 17] には庇跡が残っている。現在は、庇部分は壁面となっているが、庇がある以上ここには出入口があったはずである。弾道管が壁面に接続すると 119 号室の出入口から中廊下には向かえないため、背面を廻り、背面側から中廊下に向けて出入りしていたものと考えられる。弾道管を切断することで、これら動線の不具合は解消されるため、外壁側の開口を埋め、中廊下に直接開口を設けたのだろう。この痕跡があることで、1 号棟は単に陸軍施設内の事務所や研究棟とい

う位置づけではなく、軍事に関連した施設という近代化の遺産としての評価が可能になる。陸軍施設内の事務所や研究棟というだけでは、評価において他所の優れたものが相手となるが、この痕跡を持ち、かつ弾道管が残ることで、この施設の価値は他所のハードが優れた施設とは一線を画すことができ、ソフトがハードに影響を与えたという意味での産業遺産的な価値が見出せる。



[図 15] 119 号室



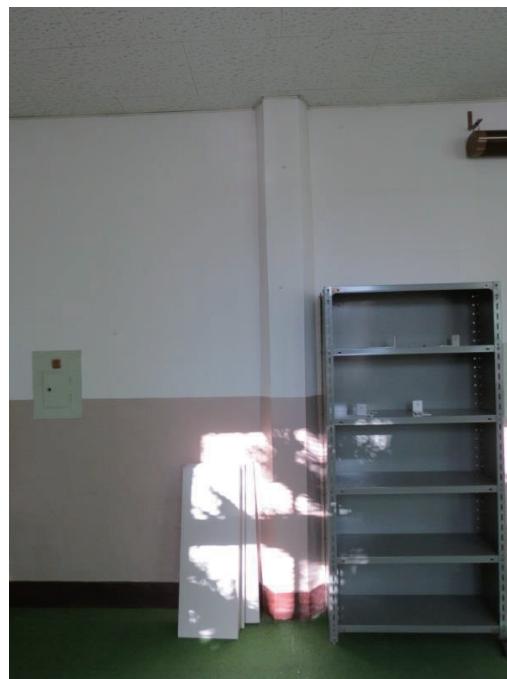
[図 16] 階段側の庇



[図 17] 119 号室部分の庇



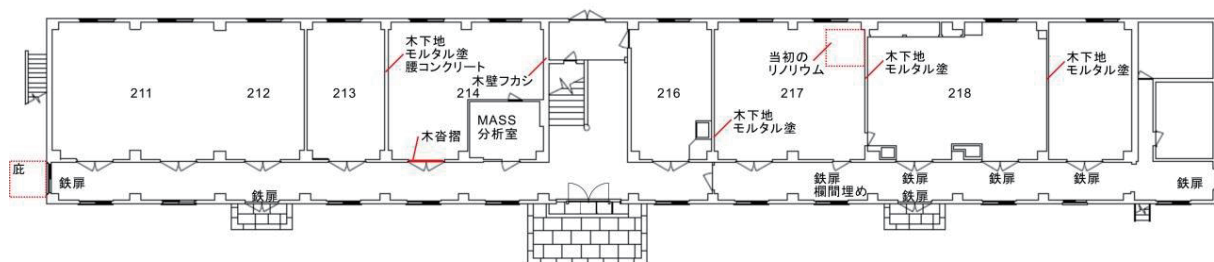
[図 18] 122 図書室内の柱



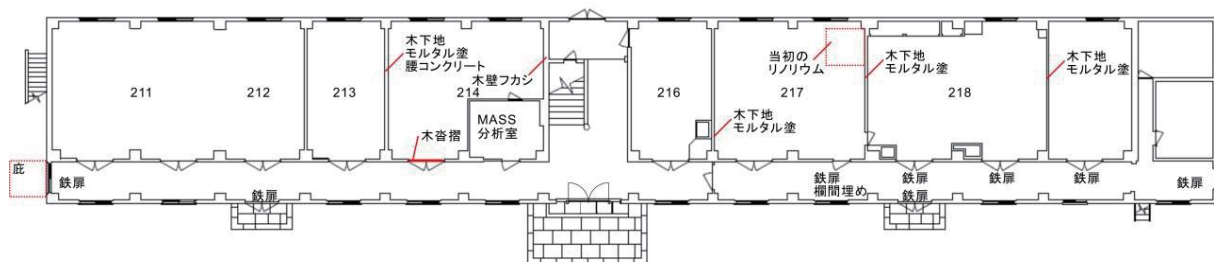
[図 19] 122 図書室内の柱

もう一点、122 図書室には [図 18、19] のような八角形となる柱型が付く。天井裏は見えないため、梁を受けているかどうかは不明であり、仮に梁を受けていたとしても 1 階には柱がないので荷重は逃がしようがない。この柱には構造や機能としての意味があるはずだが、今回の調査ではこの点は不明なままである。

2 号館



[図 20] 2 号館 1 階



[図 21] 2 号館 2 階

2号館は、陸軍時代の火薬研究所の本館的な役割を果たした建物で、鉄筋コンクリート造2階建て、昭和9年4月1日発行の地図で「火薬研究室」として確認できる。

外壁は、全体的に下塗りのモルタルと吹付仕上げで直されており、当初の様子をうかがい知ることができない。

外部に面した開口は、全体としてアルミサッシに更新されているが、1階中央玄関は枠を含めて木製建具が残されている [図 22・23]。ガラスは一部を除き更新されている。本館的な機能を備えたことから中央からは上官、左右から下士官が出入りしたものと推定される。中央は内開きで、こうすることで外から侵入する上官に扉を向けるのではなく、招き入れるような開き勝手となるので、従者が歩きながら歩行を妨げることなく先行して開けることが可能であったと推定される。扉を内開きとして従者が扉を開けて立ち、廊下からの歩行を遮ることで、出入りする上官と無用な衝突を避ける意味もあったのだろう。両側の扉は、内開きとすると廊下を歩く人にあたるため、外開きとなっている。

天井は、廊下は仕上げがないが、各室は後の更新でジプトーンなどが貼られている。廊下の天井高さは、数か所で測定したが数字にはばらつきがあり、さほど施工精度が高くないことを示唆している。



[図 22] 中央玄関建具



[図 23] 中央玄関建具



[図 24] 床の真鍮製の目地棒



[図 25] 床の真鍮製の目地棒

床は、1、2階共に廊下はモルタル塗だが、1号館とは違い真鍮の目地棒 [図 24・25] で仕切られている。やはり、1号館が中廊下型で元々実験を対象とした建物であったことに対して、2号館は南側に廊下を確保するという変則的な計画をしており、本館機能を備えたために重役が訪れたと考えられる。そのため、床に真鍮製の目地棒を用いて装飾性を高めたのだろう。この他は、後の更新でジュータンやリノリウムなどの床材が敷かれている。床は、217号室の更新された床の一部に当初のリノリウムが露出している [図 26]。

巾木は、劣化して赤茶けた様子が見られる部分は当初部分と推定されるが、基本的にモルタル巾木は塗り直されたものと考えられる。1階階段下の物置は、扉や丁番、枠など当初の様子をよく留めているが、この部分に残された巾木は赤く [図 27]、これに後年塗装をしている。つまり、下地がこの状態でない巾木は、後にモルタルで真似られたものである。



[図 26] 217号室の床リノリウム



[図 27] 1階階段下物置の巾木



[図 28] 階段



[図 29] 階段

階段は、手摺壁の巾木と笠木、階段と巾木に人造石研ぎ出し仕上 [図 28-31] が用いられている。手摺壁は白色に塗られているが、当初から白塗であったかは不明である。1号館は階段がモルタル塗で滑り止めがなかったことに対して、2号館では研ぎ

出しの階段にタイルの滑り止めが設けられるなど、仕上げを差別化して格式の違いを出している。片廊下として、階段周りに窓も広く取っていることから、階段自体も清潔で明るい。



〔図 30〕 階段



〔図 31〕 階段

室内の建具は、全面的に更新されているが、基本構成は1号館と同様で欄間が付く。欄間も多くは埋められているか、使用不能となっている。

中央玄関部分〔図 32・33〕は、開口も広く、天井も高く、廊下も南側に付くため、とても明るく小気味いい空間が広がる。同時に階段も2階北側からの彩光もあるため、かなり明るい空間が演出されている。

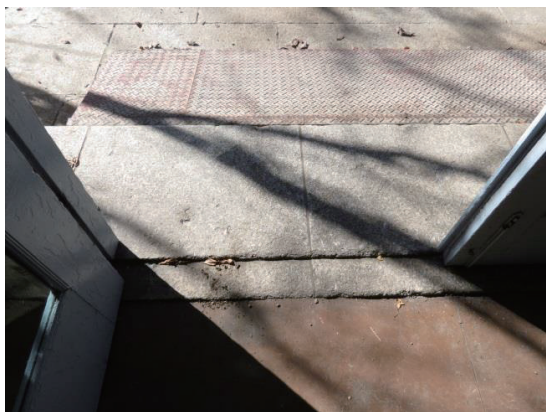


〔図 32〕 中央玄関を入れて西を望む



〔図 33〕 中央玄関を入れて東を望む

中央玄関には、沓摺石〔図 34〕や外部に石敷きがそのまま残されている〔図 35〕。庇は長く持ちだしているが、根元に装飾された持ち送りで支えながら徐々に細くなっている。持ち送りの内側は庇表面も同様に段差が付くが〔図 36〕、持ち送りから外側は段差を設けずに、庇を軽く見せるために端部を薄く〔図 37〕シャープに見せる意匠を用いている。



〔図 34〕 沓摺石



〔図 35〕 玄関外部の石敷き



〔図 36〕 段差が設けられた持ち送り



〔図 37〕 持ち送り外側は薄い庇が保たれる



〔図 38〕 分電盤 昭和 16 年 10 月製造



〔図 39〕 分電盤 昭和 16 年 10 月製造

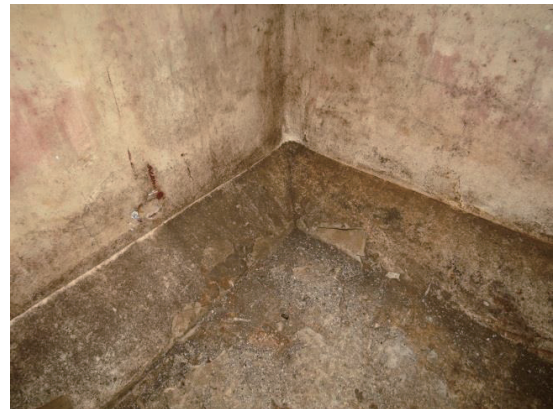
その他、分電盤〔図 38・39〕が残り、銘板には株式会社杉生電機製作所製で昭和16年10月製造とある。古い設備等はこの他には見られず、設備の導入や改修の時代性については明らかではない。

地下

詳細は不明である。底部の端部が面取りしてあり、地下室として使用するには不都合である。端部を部屋のように直角に収めない理由として考えられるのは、水圧を逃がすために端部に力をかけないように面取りすることがある。つまり、水槽として使用する場合は、この仕様は一般的に見られる方法である。表面には後に塗られた防水の塗膜が剥離している様子が確認できるが、当初のものではないと考えられる。こうした点からも元々水槽として使用していたものを、野口研究所となってからも再利用したものと推測される。



〔図 40〕 地下水槽



〔図 41〕 地下水槽の床端部納まり